

小学生向け食農体験講座： イネとサツマイモを中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 静岡大学教育学部 公開日: 2013-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤井, 道彦 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/7197

小学生向け食農体験講座 －イネとサツマイモを中心に－

技術教育講座 藤井道彦

1. はじめに

近年、食の安全・安心が注目され、食に対する関心が高まっている。また、給食における食べ残しがみられることが多い。学校教育の中においても食育の推進が重要視されているが、これまで、学校教育において実践されている食育の多くは、「食」のみに重点を置いて扱ったものが多く、「食」の前提となる「農」についての体験をふまえた「食農体験」としての観点に欠けことが多いように思われる。

一方、「食」を得るために作物の栽培には労力や時間が必要であり、また、栽培に要する場所を考えると、教育現場だけで多様な食農体験を行うことは困難なことが多いと思われる。その改善策のひとつとして、大学との連携があり、大学が関わることにより、教育現場のみでは実践することが容易ではない食農体験や、子どもたちに興味をもたせることができる、より深い内容についても扱うことができるものと期待される。

また、教育現場と大学とが連携することの中で、教育学部において教員を目指す大学生が食農体験講座の補助として、目的意識をもって子どもたちと関わることにより、教員採用に向けても、また、将来教員として採用されて実際に子どもに教える立場になった際ににおいても、大変貴重な体験をすることのできる機会であると考えられる。

2. 食農体験講座の実践

昨年に引き続き、大学近くにある静岡市立大谷小学校 3 年生 65 名を対象に、総合的な学習の時間を利用させていただき、食農体験講座を行った。食農体験講座は、子どもたちに大学まで来てもらい、静岡大学教育学部自然観察実習地において各回約 2 時間行い、長期休暇の期間を除き、約 1 ヶ月に 1~2 回の割合で、6 月から 2 月にかけて、以下の内容で計 9 回の実践を行った。

昨年度までは、日程の都合の関係で、イネは稻刈り、サツマイモは芋掘りからの収穫体験からの開始であったが、本年度は小学校のご都合をつけていただき、イネは田植えから、サツマイモは蔓の移植からと、子どもたちに自分達で最初から栽培したものを収穫し、試食する体験をしてもらうことができた。

- ・実施日時：第 1 回 6 月 4 日（金）田植え
第 2 回 6 月 22 日（火）サツマイモの蔓の定植
第 3 回 10 月 18 日（月）野菜苗の畑への定植
第 4 回 10 月 26 日（火）稻刈り
第 5 回 11 月 9 日（水）サツマイモの芋掘り、野菜の収穫
第 6 回 11 月 26 日（金）サツマイモの試食、野菜の収穫
第 7 回 1 月 21 日（金）稻刈り後の作業、野菜の収穫
第 8 回 2 月 4 日（金）わら縄作り、野菜の収穫
第 9 回 2 月 18 日（火）餅つき、野菜の収穫
- ・参加人数：小学 3 年生 65 名
- ・活動場所：静岡大学教育学部自然観察実習地

食農体験講座全体としては、イネとサツマイモ以外に、野菜として、ダイコン・コカブ・ハクサイ・キョウウナ・ブロッコリーの栽培・試食についても行ったが、ここでは田植えから稻刈り・もちつき・試食まで行った稻作と、蔓の定植から芋掘り・試食まで行ったサツマイモについての食農体験を中心に紹介する。

本年度は、稲作では田植えから食農体験を開始することができた（図1）。ほとんどの子どもにとっては初めての田植えの体験であったが、田植え後の感想から、「大変だったけど楽しかった」「むかしの人はたいへんだったんだと思いました」など、楽しさと大変さの両方を感じてもらえた子どもが多くいたようである。また、「最初はきもちわるいと思ったけど、入ってみたらきもちよかったです」「さいしょは土がべたべたしていやだったけど、やっていると、べたべたかんが、気もちよくなってきた」など、最初は泥の中に入ることへの抵抗感もみられたが、慣れてくるとなくなつたようだ。「いねかりもすごくたのしみです」と、稻刈りを楽しみにする感想もみられた。

サツマイモについても、本年度は蔓の定植から食農体験を開始することができた（図2）。2クラス合わせて、ベニアズマ、鳴門金時、パープルスイートロード、タマユタカの4品種を植えてもらった。これまでにサツマイモの蔓を植えたことのある子どもはほぼ半数であった。感想から、「さいしょはうまくできなかつたけれど、うまくできたのでうれしかつたです」「ドロに入つたりたいへんだったけど楽しかつたです」など、前日の雨の影響でぬかるんだが、楽しんでもらえた様子が伺える。また、「いろんなしゅるいがあつてびっくりしました」と、種類の違いにも注目してもらえたようだ。

稻刈りは、子どもたち自身で鎌を用いて行い（図3）、刈ったイネは、はざ架けしてもらった。稻刈りはほとんどの子どもが初めての経験であった。感想から、「さいしょはかまがこわかったけど、楽しかつた。また、やりたいです」など、最初は鎌を使うことを心配しながらも、慣れてくると楽しくなり、またやってみたいとの意欲がみられた。また、「田うえよりも大へんでした」と、作業の大変さに気付いた感想もみられた。

サツマイモの芋掘りでは、紫芋も含め4種類のサツマイモの茎や葉、掘った芋の色や形などを比較してもらった（図4）。「はじめつるがあつてたいへんだったけど、みんなでやつたら楽しかつたです」など、皆で協力して行うことの大切さに気付いたり、「いもはおなじでもいろんなしゅるいがあるのがわかつた」「いもやつるも色々あつてすごかったです」など、品種による違いに気付いたり、「いもほりしている人のたいへんさが分かつた」など、作業の大変さについての感想もみられた。

収穫した芋は品種ごとにゆで、4種類のイモの味や色などを比較してもらった（図5）。感想では、「いろいろなしゅるいがあつて、おもしろかったです」「4しゅるいとも、色、あじがちがいました」など、サツマイモにも色々な種類があることに気付いて違いについて色々な発見をし、4品種それぞれについて、試食した感想を詳しく書いてくれていた。品種を比較することにより、興味が増したように思われる。

また、収穫後に食用にするためには多くの作業を行うことが必要であることを、体験を通して学習するため、脱穀・糲すり・精米といった稻刈り後の作業を、手作業で体験してもらった（図6）。感想から、「たいへんだったけど楽しかつたです」「昔の人は手間をかけて作業していたんだなと思いました」「昔の人は大へんだったということがわかりました」など、楽しかつた反面、昔の人の作業の大変さに気付いたり、「白米にするまでに時間がかかるから大切に使おうと思いました」など、お米に対する気持ちに変化が見られたようだ。

また、脱穀で生じる稻わらも利用することができ、昔から有効に利用してきたことを、わら縄作りの体験を通して学習してもらった。感想から、「さいしょはむずかしかつたけど楽しかつたです」との感想が多くみられ、最初はむずかしいが、できたときの喜びは大きいようだ。また、「友だちに教えてもらつたら、うまくできました」と、友達との協力もみられ、「もっと大きいなわやかたちをつくつてみたい」と意欲を示す子どももみられた。

もち米を用いたため、最後に、自分たちで収穫した無農薬栽培の米を用いて餅つきを行い（図7）、自分たちでついた餅の試食を行つた（図8）。大半の子どもは餅つきをした体験があるようであった。「きねが重くてたいへんでした」との感想が多くみられたが、「楽しかつた」と感じてくれた子どもも多かつたようだ。また、「さいしょは本当におもちになるのかなとおもつたけど、おもちになつたのすごいと思いました」と、お米から餅ができる変化に驚いている子もいた。餅を試食した感想として、「つきたてはとてもあたたかくて、

やわらかかった」「おもちはすごくおいしかったです」など、自分達でついた餅に満足したようである。



図1 田植えの様子



図2 サツマイモの蔓の定植の様子



図3 稲刈りの様子



図4 サツマイモの芋掘りの様子



図5 サツマイモの試食の様子



図6 稲刈り後の作業の様子

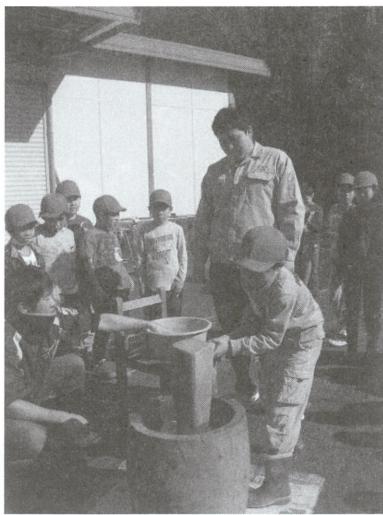


図7 餅つきの様子



図8 餅の試食の様子

食農体験講座後の子どもの感想から、「全部とてもためになつて、し食もおいしかつたです」「いろいろなことがあたまにいっぱいのこつています」など食農体験で行ったそれぞれの内容について細かいところまで記憶しており、体験を通して学習することにより、子どもの記憶に深く残っていることが伺える。また、「すごく楽しく楽しみにしていたけど時間がたつのは早いなあと思いました」と、食農体験を楽しみにしてもらえたようだ。

「むかしが大変だったなあと思った」、「さいごになるまでたいへんだなと思いました」、「昔の人は手で作業をするから大変だなと思った」など、「食」を得るための大変さに気付いたようだった。また、「サツマイモにもいろんな色があるし、たべてみたらすごくおいしかつたです」など多くの発見をしている様子がみられ、「みんなで作ったさつまいもとお米はすごくおいしかつたです」「なえ、つるから植えて手づくりで作り、スーパーでうつっているのより、おいしかつたです」「もちは何もついていないけどすごくおいしくてびっくりしました」「いろいろ食べて今まで思っていた味のイメージと食べて思った味は少しちがつたので、すききらいもかわつたのでうれしかつたです」など、自分達自身で育てて収穫することで得た「食」に対して、喜びとおいしさを感じ、好き嫌いの解消にも影響を与えていくようである。

食農体験においては、希望する大学生に子どもの体験補助をしてもらった。

3.まとめ

食農体験講座を通して、子どもたちが大変意欲的に興味をもって体験に取り組み、また、体験を通してさまざまな発見をしている様子がみられ、体験を通した食育の重要性が認められた。また、子どもたちの感想からも、食を得るための大変さに気付き、また、自分たちで作った「食」に対して、大変満足しているようであった。また、食農体験を通した感想や発見は、最終回の全体についての感想にも詳しく書かれており、体験を通して身につけたことは、時間が経過してもはっきりと記憶しているようであった。食農体験講座の補助をしてくれた学生も、子どもたちの姿や反応に多くの発見をし、教員になるにあたっての貴重な体験となつたようである。

課題として、田植えと餅つきの回を除き、本年度は大学生の補助としての参加が少なかつたため、学生が将来教員を目指す上で、子どもとふれあうことの重要性やメリットを、これまで以上に伝えていく必要があると思われる。

今後も、食農体験の教材化について、さらに検討していく予定である。